

「消化管エコーの診かた・考えかた」

岸和田徳洲会病院腹部超音波室 湯浅 肇 著
天竜厚生会診療所 井出 満

虎の門病院消化器科

竹 内 和 男

消化管のエコー検査は、最近、静かなブームである。これまで、体外からのエコー検査はもっぱら肝・胆・脾などの実質臓器が対象であったが、現在では虫垂炎・イレウス・炎症性腸疾患など、消化管疾患の診断にも欠かせない存在となっている。腹痛の患者を前にして、エコーで実質臓器しか診断できないのでは一以前はそれでも面目が立ったが、今や不十分であると言える。

消化管疾患の検査では何と言っても内視鏡が主役であるが、内視鏡が苦手とする疾患がいくつかある。例えば胃外発育型粘膜下腫瘍や急性虫垂炎、あるいはイレウスや炎症性腸疾患の急性期などである。これらの疾患の診断はむしろエコーの独壇場であり、大いに威力を発揮する。

しかしながら、消化管のエコー診断は、実質臓器の診断に比べ、“難しい”、“とっつきにくい”などの声があるのも事実である。

だが、よく考えてほしい。エコーは消化管のガスを含め生体内を忠実に描写しているのである。日頃からガスをいわず消化管を見ようとする姿勢があれば、自ずと疾患が見えてくるのである。著者が言うように、“エコーはおなかの聴診器”であり、“痛いときが検査のとき、痛い

ところにエコーを当ててみよう”といったスタンスが極めて重要なのである。

もう1つ、消化管エコーが得意とされない理由に、適当な教科書がなかったことも挙げられよう。

著者は、現在主流である電子走査装置が爆発的に普及し始めた1970年代後半から、いち早く消化管エコーに目を向け、以来、地道に多くの知見を積み重ねてきており、消化管のエコー診断の分野では第一人者である。

本書はどの系統的に書かれた消化管エコーの教科書はこれまでになく、超音波診断をきわめようとする者にとっては、本書が待望の書、格好の書であることは間違いない。

本書では、初めに“消化管エコーの考えかた”、続いて“診かた・描出のテクニック”、“消化管疾患の診かた・考えかた”、“症状からみたアプローチ”などの順に進み、最後に“症例集”があり、全体として5つの章から成っている。各章には、典型的な超音波写真とそのイラストが豊富に使われ、検査のコツについても図入りで詳しく述べられている。また、随所に、“エコーはパズル”“エコー刑事”“エコーはhead work”といった、著者の深い超音波診療の経

験から生まれたちょっとした経験・コツ・注意点などが息抜き(“コーヒープレイク”)として盛り込まれているのがうれしい。著者の臨床医としての姿勢の一端が垣間見え、共感を覚えるものである。

本書では、日常診療で遭遇する消化管疾患のほとんどが網羅されている。その超音波診断が微に入り細に入りまとめられ、診断のポイントやノウハウがふんだんに盛り込まれている。エコー室にはぜひ備えておきたい教科書の1つと言える。

これから消化管のエコー診断を始めようとする方には、まず、頻度的に多い急性虫垂炎、それとの鑑別が重要な大腸憩室炎、比較的診断の容易なイレウス、消化管の進行癌などの項を読まれることをお勧めする。それら疾患の診断がある程度できるようになれば、間違いなく消化管の超音波診断に興味湧き、その妙味が味わえるようになろう。そのときには、本書がとてつもなく内容の濃い、すばらしいテキストブックであることが実感できると思う。

● B5 頁198 図383 写真306
表7 1998 定価(本体5,500円
+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)